



一人ひとりの学びの流儀をいかして
～気づきを抛りどころとして～



幼児教育アドバイザー 関谷 祐貴子

『子どもを育てる』ことは、誰にとっても容易なことではないですね。たとえ専門家であっても。なぜなら、『人はそれぞれ異なる』からです。運動が得意な人もいれば苦手な人もいます。音楽が得意な人もいれば苦手な人もいます。それぞれできることや苦手なことが異なります。

子どもは、遊びや生活の中で、様々な情報を処理し、自分のものにして学んでいきます。『様々な情報を処理して自分のものにする方法ー学び方ー学びの流儀』は、実は違いがあるものです。それは優劣の問題ではありません。

A君（4歳）は、工作が得意で、それを使って遊びを創造することに長けている活発な男子です。A君は体育帽を被りたがりませんでした。お母さんは「体育帽を被るのが嫌いなのだ。」とずっと思っていたそうです。なぜなら、野球帽は被るからです。そんな様子を見ていた先生が「もしかしたら体育帽を被るのが苦手なのでは？」と気づかれました。多くのお子さんは、ゴムの部分を引っ張りながら被るなど試行錯誤し、直感的に『コツ』を捉え被れるようになります。しかし、一方、繰り返しの中での試行錯誤や直感的に『コツ』を捉えることが苦手なお子さんもしらっしゃいます。明確な手順ややり方を納得できるように教えてもらえたら、できるようになるお子さんもいます。先生とお母さんは、この『学びの流儀』をいかし、被り方を細分化して一つ一つ丁寧に教えました。A君は体育帽を被るようになりました。

B君（5歳）は、『水は高きから低きに流れる』知識を使って、砂場で川の流れを上手に作り出せるお子さんです。彼は、上着を着るのが苦手でした。手伝ってもらいながら繰り返すうちに着られるようになるだろうと考えがちです。実際にそういうお子さんは多いと思います。しかし、彼はそうではなかった。先生は、『上着を着る』行動のどこに苦手さがあるのだろうかと考え、観察されました。その結果、『上着をもつ手の位置とその指』に曖昧さがあるのではないかと気づかれました。そこで、上着を持つ箇所にボタンで印をつけ、持つ指を教え、はおり方を教え、見守り続けられました。その結果、B君は自力で着られるようになりました。どこで困っているのかを見取り、その気づきを抛りどころとして、B君の『学びの流儀』をいかした指導がなされたということです。

今回は、身辺自立について述べましたが、言葉に関する情報処理の仕方や感じ方にも違いがあります。

気づきを抛りどころとして、『一人ひとりの学びの流儀』をいかし『子を育てる』ことが、成就感や達成感をもたせる子育てに繋がるのではないかと思います。

